

学校図書館・学校司書の可能性

日本図書館研究会九州

ブロックセミナー座談会報告

報告者： 五十嵐絹子・高木享子
座間味利美子・野里純・喜納志穂子
司会： 望月道浩
構成： 山口真也・呉屋美奈子

■ はじめに

2010年9月6日(月)、日本図書館研究会の主催により、沖縄国際大学図書館4階AVホールにて、「九州ブロックセミナー—学校図書館・学校司書の可能性」が開催された(参加者130名、沖縄国際大学・那覇市教育委員会・うるま市教育委員会後援)。本セミナーは、沖縄県図書館協会調査研究部会が企画・運営を引き受け、学校図書館アドバイザー・元鶴岡市立朝陽第一小学校司書である五十嵐絹子氏による講演「学校司書だからできること、しなければならぬこと—図書館の活用を全校に広げるために」をふまえて、五十嵐氏とともに語り合う座談会形式のディスカッションを実施した。ディスカッションでは、五十嵐氏の他に、日本図書館研究会ブロックセミナー担当理事である高木享子氏、沖縄県の小中学校図書館から座間味利美子氏、野里純氏、喜納志穂子氏の3名にもご登壇いただき、琉球大学教育学部望月道浩氏の司会の下で、沖縄県の学校図書館が抱える問題点について4つの柱を立てて議論した。本稿では時間の都合により発言が不十分になった部分などを一部補足しながら、議論の内容を報告してみたい。

■ 自己紹介・問題提起

望月： みなさんこんにちは。後半の座談会の方の進行を務めさせていただきます琉球大学教育学部の望月道浩と申します。本日は「学

校図書館・学校司書の可能性」というテーマとなっておりますが、琉球大学では図書館司書資格課程は設置されておりません、私は主に司書教諭の養成という立場から、学校図書館に関する教育・研究に携わっております。本日はどうぞよろしくお願ひ致します。まず私の方から、簡単にこの座談会の趣旨を説明させていただきます。先ほどの五十嵐先生からのご講演を受けて、みなさまからたくさんのご質問を頂いております。ご質問の内容につきまして、いくつかのカテゴリに分けさせていただきながら、議論の柱を設定して座談会を進めるとともに、せっかく五十嵐先生、高木理事に沖縄まで足を運んでいただきましたので、沖縄の学校図書館が抱えるさまざまな問題についてアドバイスをいただくと同時に、沖縄の学校図書館の実情を知っていただき、それを全国に発信できるような座談会にしていきたいと思っています。ではまずご登壇いただいた皆様の自己紹介と、沖縄の司書の皆様からは五十嵐先生の講演を受けて感じたことなどを発言していただければと思います。

高木： 私は現在、日本図書館研究会でブロックセミナーの担当しておりますが、この3月までは、大阪の箕面市というところで小学校の司書として17年間勤めましたので、沖縄の皆様にも少し箕面市のことをお伝えしたいと思っています。箕面市では、1992年度にはじめて小学校に1人司書が入りまして、それから

毎年数名ずつ採用があり、1996年度で全小・中学校（小学校13校、中学校7校）に司書配置が終了しました。私は1993年度に、公共図書館から学校へ異動になりました。それまでまったく人がいない状態でしたので、まずは環境整備から始めました。また、「司書連絡会」（月1回）という公的な研修の機会も保障されましたので、学校司書としての仕事内容の共通理解から始まり、学校間や公共図書館の本の貸借、授業支援のための資料研究など、その時々で課題となっていることについて試行錯誤しながら取り組んできました。今日も、時間があればそういった司書時代の経験も含めながら、発言させていただければと思っています。よろしくをお願いします。

五十嵐： 先程の講演では、時間オーバーをして申し訳ありませんでした。伝えたいことがいっぱいあって、少し言葉が飛んでしまったのではないかと心配していますが、会場みなさまを見ていて、やっぱり現役の学校司書っていいなあと羨ましい気持ちであります。本日はよろしくをお願いします。



（五十嵐綱子氏：学校図書館アドバイザー・元朝暘第一小学校司書）

座間味： こんにちは。私はうるま市立具志川東中学校にこの4月から勤務しています。中学校の図書館に勤務するのは16年ぶりです。今日は中学校の立場でお話しをして

ください、という依頼を受けたのですが、久しぶりの中学校ですので、どこまでお話ができるか少し不安です。具志川東中学校は在籍生徒数が514名で、15学級プラス特別支援が2クラスあります。県内ではオープン教室のはしりの学校で、開校当初は図書館自体がありませんでした。開校してから30年くらいになるのですが、30年の間に3回図書館の場所が変わっています。現在はランチルームとして使われていたところを改装して使用しています。スペース的には2クラス同時に授業ができるような図書館で、以前よりは使いやすくなってきていますが、やはりランチルームを図書館にしていますので、廊下を挟んで閲覧室と司書室があるという設計になっていたりして、司書としては使いづらい部分も残っています。昨年の貸出冊数は全体で1万4163冊、1人平均で26.2冊です。図書予算は教育委員会から65万円、充実費（生徒1人100円徴収）が60万円です。新聞雑誌もすべてここから出しています。「朝の読書」については、1学期までは毎日時間が取られていたのですが、学習指導要領が改訂になり、その「先取り実施」という形で（授業時数確保のため）、火曜日の授業のスタートが8時35分になったため、朝の読書が1日減らされてしまいました。授業での図書館活用状況としては、3年生の「選択社会」で、資料を活用して自分の考えをまとめよう、ということをやっている、毎週入ってきています。「国語」では課題の仕上げの段階での活用が多く、生徒ごとに課題が終わるスピードがまちまちなので、出来上がった生徒は自由読書をしてもいいよ、という使われ方がほとんどです。「道徳」や教科担任の年休の時に自由読書の場所として使われることも多いです。「総合

学習」では修学旅行やキャリア学習に向けての調べ学習がこれから入ってくる予定です。以前勤務していた小学校では、各学級で「図書の時間」が週に1回設定されていて、その時間を使って教科に使える資料紹介やアニメーションを行っていたのですが、中学校ではクラスごとに決められた図書館活用の時間がないので、どのように図書館活用教育を行っていけばよいのか、私自身も模索中というところでした。

野里： 今年の4月から那覇市立真嘉比小学校に勤務しています。司書の資格は沖縄国際大学で取りました。確か、沖縄国際大学に司書資格課程ができた時の、第1期生だったと思います。私は那覇市の司書資格の保有者枠で採用されている正規職員ですので、基本的には那覇市内の小中学校の図書館か、市立図書館に配属されることになっています。しかし、身分としては一般職員と同じなので、場合によっては、自治体内のどこに配属されるか分からないという立場でもあります。那覇市内には53校の小中学校がありまして、今年の3月までは児童数1000名を超える、市内で最も大きな小学校(金城小学校)で働いていました。この4月からは反対に、那覇市内で下から3番目に児童数が少ない(220名)の小学校で働いています。前任校では、1人あたりの年間貸出冊数が200冊を超えていました。朝の7時45分頃に開館して、午後4時の閉館まで、始終貸出・返却作業に追われていました。また、授業の利用はクラスごとに週に1回設定されていますが、32学級ありましたので、学級利用の時間割が毎日1校時から6校時まで埋まっているという大変忙しい図書館でした。その後、全児童220名ちょっとという小規模の学校に来て、扱え

る予算がだいぶ減り、クラス数も少ないので、ゆるやかに流れていく時間に驚いています。自分の仕事についていろいろ考える時間もとれるようになっていまして、五十嵐先生の本を読んで、前任校で見失っていた何かを思い出しつつ、仕事をしているという感じです。私は、去年、那覇市の司書研究会の会長を務めていましたので、その立場から那覇市全体のことを紹介しますと、県内では、学校司書の引き揚げなどが進んでいるところもありますが、那覇市は比較的恵まれていて、小中学校の司書が53名いる中で、半数以上が正規職員です。図書の購入予算についても、何年か前に段階的に減らされましたが、それ以降は減らさないようにしようという考えが教育委員会にあって、図書購入費が維持されていることも恵まれていると感じています。そうした中で問題を感じていることを1つ挙げると、臨時職員の方をどこまでフォローするかということです。司書研究会では10名ずつくらいで5つのブロックに分かれ、1ヶ月に1度の割合で研修を行っています。全司書が一同に集まることもありますが、ブロック単位での研修が多いです。このブロックは、ブロック内のフォロー態勢としても機能しています。コンピュータの操作や業務上のトラブルや疑問を、お互いで助け合っていく仕組みです。その一環として、本務の立場から、臨時の方々のフォローをすることも多々あります。そこで、有資格者として図書館に勤めているのであれば、プロとして頑張りたいという気持ちがある一方で、雇用条件、賃金のことを考えると、臨時の職員の方々にどこまで、何をやってもらえばいいかたまに見失うことがあります。例えば、自分自身は、校内読書月間や本が大量に納品されたときは、

サービス残業でもって作業を進めても仕方ないと思っています。また、学校の規模によっては、サービス残業を日常的におこなわないと日々の仕事がこなせないところもあります。それを臨時の方にどこまで求めていいのか、悩んでいます。時間があれば、今日はそのあたりをみなさんとお話できればと思っています。

喜納： みなさんこんにちは。私は那覇市立石嶺中学校司書の喜納志穂子と言います。私は本日の登壇者の中では司書としての経験が一番短くて、今年で採用6年目です。石嶺中学校には去年の4月に配属になりました。その前はさつき小学校で4年間働いていました。今日は大学生もいるようですので参考に紹介しておきますと、私は那覇市の正規職員なのですが、那覇市の採用試験を受けた時は全体で97名受けて、採用は2名でした。頑張ってください。(会場笑) 私が最初に配属された学校はさつき小学校でした。4月に配属になって、「さあがんばるぞ」と思ったのですが、1週間に1回の「図書の日」では、先生と子どもたちは図書館にはやってきますが、先生は子どもをほったらかしでテストのまる付けをしている、ちょっと残念……というか、とても嫌な状況でした。先生たちからまず変えないといけなかつと思いつつ、新任の立場でしたのでなかなか指摘できずに、この状態で1年間我慢しました。2年目、最初の職員会議で思い切って「こういうのはやめていただきたい、読書教育をしっかりしてほしい」とかなり強い言葉で言いました。そうするとちゃんと先生方は聞いてくださって、その頃から、私自身も頑張らないといけなかつと思つて、ブックトークを始めるようになりました。毎月、新しい本を紹介する形で、3年間続け

ました。他にも、幼稚園との交流も行なったりして、その子どもたちが小学校に入ってくると、利用マナーもしっかりできていて、自分なりに楽しく小学校で働けるようになってきました。しかし、昨年、中学校に配属されてまず驚いたことが、図書館を利用する時間が小学校のように設定されていないということでした。生徒たちは個別で図書館にやってきます。しかも、生徒たち1人1人のマナーが大変よろしくない。そういう状況の中で、1年半勤務してきましたが、現在もどのように学校図書館を活かしていけばいいか、悩んでいます。小学校では読み聞かせやブックトークなどいろいろできましたが、中学校に来てみると、とにかく時間がないんですね。先生たちにブックトークをやりたいと言っても、授業時間は5分しかもらえません。今日は中学校でどんなふうに学校図書館活用教育に取り組んでいけばいいかをみなさんと話し合えればと思っています。



(喜納志穂子氏：那覇市立石嶺中学校司書)

■ 中学校での学校図書館活用アプローチ

望月：ありがとうございます。ただいま沖縄の司書の皆様から自己紹介を兼ねて問題提起を頂いたところで、この後は、フロアから頂いた質問と絡めながら、議論を深めて参りたいと思います。まず、小学校とは違って中

学校では図書の時間が設定されていないので、学校図書館を教育の中でしっかり位置付けることが難しいという問題提起がありました。そこから論点を絞りたいのですが、この点を中学校のお二人から補足していただいてよろしいでしょうか？

座間味： 先ほども少し話しましたが、沖縄県ではほとんどの地域の小学校で「図書の時間」が設けられていると思います。前任校でも、クラスごとに毎週のように図書館を使う時間がありました。担当の先生と事前に打ち合わせをして、現在習っている単元の関連とか、季節のものとか、そういう観点で10分～15分くらいもらって、読み聞かせを入れたり、ブックトークをしたりすることも多かったです。時間がないときは、単元に関連する本を展示して、時間内に自由に手に取ってもらうこともありました。ただし、中学校ではこうした決まった時間が設定されていませんので、私が赴任した当初は、ほとんどの教科で図書館が利用されていない状況でした。図書館利用があるのは、「〇〇先生の年休なんだけど、図書館に(クラスを)入れていい？」といった感じだったんですね。

喜納： 私はまだ中学校での図書館活用についてしっかり取り組めていないので、今日はみなさんの学校での取り組みを聞きたいなと思っています。野里さんは以前中学校に勤務されていた経験もあるそうですが、中学校時代の学校図書館の活用状況はどうでしたか？

野里： 私は採用されて初めて赴任した学校が中学校でした。経験が浅かったので、当時から問題点がはっきり見ていたわけではないのですが、中学校から小学校に移ってまず感じたことは、小学校での先生たちとの関係の密度の濃さでした。中学校に勤務していると

きは、授業でよく使う先生とそうではない先生がいて、図書館を使わない先生との関係はとて薄いものでした。授業でよく使う先生についても、事前の打合せもあまりなくて、社会の先生はいまこれを始めた、ということをなんとなく察知して、子どもが動き始めるのをみて追いかけるように資料を揃えるという感じでやっていました。それでも、中学校では生徒たちが図書館の利用方法のある程度分かっているので、なんとか対応できていたように思います。ただし、小学校では図書館の利用方法に慣れていない子どもも多くて、そういう対応は無理ですので、事前に入っていないといけない、と感じるようになっていきます。事前に先生たちと打ち合わせをすると勉強になることも多くて、今振り返ってみると、中学校時代はあまりきちんと対応できていなかったような気がします。先ほどの五十嵐先生の講演の中で、授業のカリキュラム、年間計画をしっかり確認するというお話がありましたので、先生個人の動きを察知して対応する、というやり方ではなく、これからは年間計画をしっかり確認して、学校全体の動きを把握して、図書館の活用を考えてみたいなと思っています。



(野里純氏：那覇市立真嘉比小学校司書)

望月： 座間味先生の中学校では、先生が年休の時に図書館を使うクラスがあるということでしたが、そうした状況の中で、何か工夫されていることはありますか？

座間味： 私は、どのような形であっても図書館に入ってくるクラスがある限りは、何らかの形で図書館をアピールするようにしたいと思っています。例えば、ただ図書館で自習させるだけでなく、本を読ませる時間をとらせるようにしましょうね、と先生に提案して、まず本を探す時間を設定して、何分までに本を選んで席に着くように指示してもらいます。中学生の中には時間内に本を探せない生徒もいますので、本を何冊か持って行って、「これはどう」と声をかけながら、図書館での読書指導のきっかけにしています。たいてい生徒は本を勧めると手に取ってくれますが、中にはしぶとい生徒もいて、100%うまく行っているわけではないのですが、そういう生徒には「読まないでもいいけど、静かにはしてね」という感じでやっています。ただこれだけでは図書館は読書をする場所で終わってしまいますので、授業との関わりをもっと深めたいと思っていて、夏休みに入ってから、社会科の担当者に「1時間もらえませんか？」とお願いをして、社会科で「裁判員制度」を取り上げる時期に、関連する本を紹介するという計画を少しずつ進めているところです。

望月： 五十嵐先生から何かアドバイスはないでしょうか？

五十嵐： 中学校での取り組みについては、島根県の東出雲町立東出雲中学校ですごくよい実践がなされています。私の『学校図書館ビフォー・アフター物語』（国土社、2009）でも紹介していますのでぜひ読んでいただきた

いのですが、東出雲中学校に初めて配置された実重さんという司書の方が、先生たちに授業で図書館を使ってもらうために、資料の紹介を上手になさっています。中学校の総合学習は、「キャリア教育」「環境問題」「平和学習」など、ある程度テーマが決まっています。だから、学校図書館側からの資料活用などのアプローチが比較的やりやすいそうです。中学校の先生たちに学校図書館を使って授業ができるという信頼を勝ち取っていくためには、まず「総合学習」のテーマの本はがっちり揃えるということが大切だと思います。近々、キャリア教育があるということキャッチしたら、まず使えそうな本のリストを作って、公立図書館の本も加えて、最低でも100冊揃えて、調べ学習をする先生に渡します。足りない場合は、近隣の学校図書館からも借りる。沖縄の学校図書館ではできますよね？それと、学校図書館を改装する時や蔵書点検をする時はできるだけ先生を巻き込んでやるとよいです。先生たちと一緒に図書館づくりをやってみると、「あ、この本授業に使えそう」というように、先生たちに利用者の視点で図書館の本を見てもらえます。こんなふうには先生たちを刺激していく。みなさんの周りには「刺激材料はいっぱいある」ということに気づくことが第一歩だと思います。

■ 新学習指導要領・ゆとり教育見直しの影響

望月： 先ほどの沖縄の皆様からの自己紹介の中で、学習指導要領が改訂になって、授業時間数が増えたため、朝の読書の時間が減らされているという報告がありました。学校図書館を活用した教育を全校に広めていこうということは学校司書の皆様の願いだと思うのですが、学校運営の中に位置付けられた時には、

やはり管理職の考えが大きく影響する部分もあるという問題提起だったかなと思います。座間味先生、そのあたりをもう少し補足していただけないでしょうか？

座間味： うるま市でも、つい数年前までは図書館を活用しようという動きが多くのある学校であったように思います。ただ最近感じることは、「ゆとり教育の見直し」という流れの中で、学校教育が図書館から遠ざかってきているのではないかと、ということです。以前、勤めていた小学校では「図書の時間」がしっかり確保されていたのですが、最近では、一部の学校で、管理職から、「図書の時間も教科の時間に置き換えないとおかしい」というクレームが付いたという報告があります。つまり、「図書の時間」とそのまま時間割に書いていると、「授業をしていないじゃないか」と管理職から指摘される学校もあるようです。その背景にはやはり、授業時数を確保して、ゆとり教育の見直しにつなげていこうという動きがあるのではないのでしょうか。こうした雰囲気の中で、図書館を活用する授業がだんだんやりにくくなっているようにも感じています。先ほども言いましたが、「朝の読書」についても、これまでは「読書は大切」という方針でかなり力を入れてやってきたのですが、一部の小学校では「朝の読書」の時間がドリル学習に変わりつつあります。そうした流れを学校図書館がどう食い止めるかということがこれからの大きな課題になってくると思うのですが、やはり管理者によって図書館が左右される部分があるので、まずは管理者によい働きかけができないか、何かヒントを頂ければと思っています。

望月： 身近な事例ですので、話しづらいこともあったかもしれませんが、詳しくご説明

いただきありがとうございます。座間味先生からの今の問題提起について、五十嵐先生、高木理事にご意見をお聞きしたいのですが、いかがでしょうか？

五十嵐： 来年度から小学校で新指導要領が始まりますが、新しい教科書を見たところ、単元そのものはそんなに大きくは変わっていませんでした。もっとガラッと変わるかな、と思っていたのですが、変わったところは、むしろ本の記述が非常に多くなっているという点です。つまり、教科書の各単元の中で非常にたくさんの本が副読本として紹介されています。教科書が20%、30%ぶ厚くなると、それだけ時数が増えて、余裕がなくなるというふうに受け止めるかもしれませんが、実際の子どもたちにうんと本を読ませる形で進んでいますので、単純に教える内容が増えるということではないと思います。まずこの点を学校司書自身が抑えておかないといけないと思います。そして、新しい学習指導要領でも、教え込み教育に戻ることが推奨されているわけではなく、知識をいくら注入しても学力は上がらないという考え方は決して否定されていません。今の学校教育では、考える力、読み取る力、判断する力、そういう学力が求められています。その上で管理職との関係を考えていくと、校長先生が一番気にしているのはやはり「学力」です。読書を盛んにして、学校図書館を子どもたちが活用することによって、学力が上がるということを学校司書はもっと強力に言ってもいいのではないかと私は思います。実際に、朝陽第一小学校が学校図書館大賞を受賞したとき、2003年頃だったと思いますが、衆議院の文教委員会で読書と学力に関する質問が2回も出て、当時の文科省の大臣がそう答えている記録がありま

す。新学習指導要領に振り回されて図書館を使わなくなる、ということはとてもおかしなことで、もし校長先生が図書館を使わなくてもよい、と考えているなら、それは今の教育の方向を分かっていない、ということになります。とは言っても、図書館を教育に活かすということが殆ど理解できていない校長先生も確かにいます。校長先生に理解を求めるときは成果を見せることがとても効果的です。校長先生は学校の経営者なので、どんな教育成果があるかということには非常に強い感心を持っています。実は、私が朝陽第一小学校に赴任した当初は、不読児が大変多いし、先生方も学校図書館に関心が薄かった。そこで、私はまず図書館の模様替えから取り組んだのですが、環境を整えるだけで手がいっぱい、1年目は子どもたちに対する読書指導などはそれほどしっかりとできなかったのです。ところが、図書館の様子が変わっただけでも効果はあって、1人あたりの貸出冊数が51冊から75冊、1.5倍に増加しました。その成果を持って校長先生に、「いまは読書をするだけの施設になっていて、調べ学習をしたいと思っても資料が少ないし、環境も十分ではない」ということを相談したら、校長先生自ら教育委員会にかけあってくれて、空き教室を2つ図書館にする、ということが実現したのです。成果が見えたからこそ、校長はそこまで動いてくれたという実感があります。学校長に学校図書館に対して理解を求めるにはまずは成果をアピールすること、これが大切です。

高木： 私は2002年度に、それまで勤務していた小学校から別の小学校に異動になったのですが、ちょうどその年、「総合的な学習の時間」が本格的に始まり、2003年度か



(高木享子氏：日本図書館研究会理事)

らは司書教諭が発令になるという時期でした。学校図書館も変わっていく時だったんですね。異動先の学校も前年度から新教育課程の本格実施に向けて学校改革に取り組み始めていたところでした。基礎基本の定着を最重要課題とし、情報教育や図書館教育も基礎学力と捉えるという認識が教職員の中に生まれつつありました。そして、2004年度には図書館教育も研究の柱の1つとして位置づけられ、毎年どこかの学年が図書館を活用した研究授業を組むようになりました。図書館教育部としても校内研修を企画し、図書館資料の紹介や、子どもたちへおこなっている図書館利用指導事例の紹介などに努めました。また、個々の先生方に対してもその先生の興味関心に添った資料を紹介するなどコミュニケーションをはかりました。このような取り組みを重ねていくことで、授業で図書館を活用することの理解が校内で深まっていったように感じます。資料を紹介したり、情報提供することは学校司書として当たり前のことです。しかし、前任校でも図書館を授業に活用してもらおうと、いろいろ図書館からも発信したのですが、学校全体で図書館活用の理解が深まったという実感はあまり得られませんでした。この違いはやはり、学校の教育課程の中に図書館がしっかりと位置づけられ、研究

テーマとなったことではないかと思います。そしてこれは管理職の先生の図書館理解度が大きく関わることなのだというのも実感しました。そこで、異動などにより校長先生や教頭先生が替わった後も、普段のおしゃべりの中で「図書館ではこんな実践があるんですよ」とか、その時の子どもたちの様子などを伝えるようにしました。そんな中で、私の知らない情報を教えていただくこともありました。五十嵐先生のようなすごい実践ができたわけではありませんが、管理職の先生には学校図書館の働きを、「夢や理想」を語ることも含めて、積極的に伝えていくことが大切だなあと実感しています。

望月： ありがとうございます。フロアからも「図書館を使つての授業が年間計画の中で行われていたのですか?」、「中学校の司書です、五十嵐先生が小学校で働いていたころの、学校全体への働きかけを教えてくださいませんか?」といった質問が寄せられています。ここまでのご発言でかなり詳しく説明していただけたかなと思います。管理職への働きかけとして共通して言えることは、いかに学校図書館から情報を発信していくか、成果を見せて、学校長に納得してもらえるか、ということですね。

■ 学校司書と司書教諭の職務の区分について

望月： では次のテーマに移ります。フロアから頂いた質問で多かったものは、学校司書と司書教諭の職務区分について、ということになるかと思います。実際には、授業での図書館利用や読書指導といったところも学校司書が関わっていると思うのですが、その中で司書教諭とどのように仕事の分担を線引きするのか、といったところは、沖縄県の学校図

書館でも大きな悩みになっていると思います。こちらの点について、高木理事、五十嵐先生からお話をお聞きしたいのですが、いかがでしょうか?

高木： 箕面市でも司書教諭は発令されましたが、実際には担任を持っているので、それにプラスして特別に何かをするということとはとても負担が大きくて、「これが司書教諭の役割だ」と明確化することは難しいことです。でも、学校司書がいて、学校図書館が図書館として機能し、授業で活用ができるようなサービス体制があれば、逆に、担任を持っているからこそできる司書教諭の役割があるのではないかと考えています。今年の3月まで勤めていた小学校では、図書館教育を研究の柱にしていたましたが、「司書教諭の役割」も課題としていました。最も重要だと感じたことは、「司書」としての立場からではなく、やはり「教諭」の立場から、先生方に図書館の活用を働きかける、発信をすることができるということです。前任校も含め、私は時折、先生方通信を発行していましたが、司書教諭と一緒に発信するようになって、司書だけで発信していた頃に比べると、「授業でこんなふうに活用できた」ということがより具体的に伝えられるようになったと思います。そこで私は資料紹介や新聞報道記事から著作権のことを伝えるなど、図書館サービスの視点から発信するなど、それぞれ専門性を意識して紙面づくりをするように心がけました。また、図書館の校内研修の内容も同様なかかわりで企画を考えることができました。ただ、こうした役割ははっきりと線引きできるものではないという気持ちも一方であります。理想論かもしれませんが、ここからここまでは司書教諭、ここからここまでは学校司書という考

え方ではなく、それぞれが重なり合っていて、反対に重なるからこそ、豊かなものが生み出せたらいいなあとも思っていました。

五十嵐： 私が学校司書現役で若い頃は、司書教諭や図書主任はなかなか図書館運営に関わることができていませんでした。だから私は、どんな仕事であっても、それが教育的な領域に入ってくるものであっても、自分で勝手に線引きをしないで、自分でできることはすべて自分でやるようにしていました。ただ、2003年度から、朝陽第一小学校では、図書館活用教育を学校教育の中核に据えるということになったのですが、その際、司書教諭を「副教務」の立場に置いて、専任ではないのですが、各学級にT.T.として入れるように配慮しました。そうなってくると、以前、私が一人で何でもかんでもやっていたのでかなりパニック状態だったのですが、その仕事の中で、クラス担任から外れた司書教諭に何をしてもらったらいいか、正直なところ戸惑いを感じる部分もありました。例えば、それまで私は、子どもへの図書館だよりも、保護者向けも教諭への図書館だよりも書いていましたが、そのうち、教諭への図書館だより作成を司書教諭に移した方がいいかな、と思っても、自分がそれまでやっていたことを司書教諭に移すというのはとても厚かましいような気持ちになって、なかなか言えなかったのです。そういうことがあって、司書教諭の先生もどうしたらよいかわからなかった時期があったと思います。そうした関係の中で、自然に職務区分ができるようになった点は、「司書教諭は図書館を活用した授業実践で勝負する」ということでした。やはり新しい教育の形ですので、先生たちの多くは図書館を活用する授業のあり方がピンと来ていません。そ

こで司書教諭は自身で勉強をされて、図書館を活用した授業を「研究授業」という形で先生たちにどんどん見せていったのです。読書指導の面でも、司書教諭が、「読まない子はこういう傾向があります」「こういう指導をして欲しい」といったことを職員会議で強く要望していくということもやってくれました。先生たちがいかに授業で図書館を使うか、読書指導をするか、ということに触発してくれた。少し話が戻りますが、こんな風に、司書と司書教諭がいろいろな先生と関わりを積極的に持って、もちろん、いきなり全ての先生と関わりを持つことは難しいと思うので、まずは仲良しの先生に声をかけて、図書館がサポートしながらしっかりと教育実践をやらせてもらう。そして、そうした実践の輪を少しずつ広げていく。新型インフルエンザではありませんが、良いウイルスを一人ひとりに感染させていくかのように、広げていくという方法で、学内での図書館の位置付けはかなり変わると思います。学校司書と司書教諭が図書館活用教育を広げていく同志として意識することで、よい関係もできてくると思います。

■ 学校司書の非正規化問題を前に取り組むべきこと

望月： ありがとうございます。学校司書と司書教諭がうまく連携しながら、先生たちに良いウイルスをどんどん感染させて、学校図書館活用教育の「パンデミック」を起こして、学校図書館と先生たちをつなげていくことが大切ということですね。では、残された時間もわずかですので、次のテーマを最後としたいと思います。座間味先生がうるま市の説明で触れられていましたが、沖縄県内のいくつかの自治体で、最近、学校司書の採用の

見通しが立たなくなってきたという状況があります。学校司書が継続的に採用され続けていくためにはどうすればよいか。この点について座間味先生が懸念されていることをもう一度ご説明いただけますか？

座間味： うるま市は4市町村が合併して5年たちました。その中で起こったことを今日は正直にお伝えしたいと思います。私が司書として採用されていた旧具志川市は、今思



(座間味利美子氏：うるま市立具志川東中学校司書)

い返してみると、学校図書館に関する政策はある程度は充実していたと思います。市立図書館との資料の連携もとれていて、各学校に資料を運搬するための配送車も廻っていました。しかし、4市町村の合併により、最初になくなったのがこの配送車でした。また、合併前は市立図書館を含めて、すべての学校の図書館の所蔵情報を確認できたのですが、旧石川市と与那城町、勝連町はまだパソコンが入っていない状態ですので、今はそれが出来なくなりました。市立図書館の資料については予約まではかけられますが、データ変換はできない状態になっています。予算の面でも、現在の勤務校は65万円ですが、合併前に勤務していた同規模の学校では100万円以上の予算が付いていて、それ以外にも新聞雑誌費も確保されていました。職員の採用状況

についてはもっと厳しくて、退職にともなう新規採用が合併後は全く行われていません。それに伴って、小規模校には本務を置かないという方針がとられるようになっていきます。こうした状況は沖縄県内のいくつかの自治体で起こっていると思うのですが、どのように対抗していけばいいのか、と悩んでいます。ここで五十嵐先生、高木理事に質問ですが、先月号の『ぱちわーく』（学校図書館の「人」をめぐる情報交換誌）を見ていたところ、五十嵐先生が勤務されていた鶴岡市でも、学校司書が嘱託化（非正規職員化）の方向に進んでいるという話題が掲載されていました。鶴岡市ではどのような方法で正規職員の継続採用を求める運動を進めたか、または運動を進める中でこうすれば良かった、と思われることなどがあれば教えていただきたいです。

五十嵐： 学校司書が非常勤化していく、という動きは全国的な傾向になってきていると思います。私が働いていた鶴岡市でも、司書教諭の配置が始まった前後（2002年～2003年頃）に、学校司書の非正規職員化ということが行政内部で提案されて、深刻な状況になりました。うるま市と同じように鶴岡市も市町村合併をしたのですが、合併の中心課題は人件費を減らすということで、子どもたちの一番身近にいる学校司書の正規職員を減らすということが、行政改革大綱の中にきっちり入っていたんですね。私たちは、それを何とか跳ね返そうということで署名運動をやってきました。学校図書館や子どもの読書を支えるために市民運動団体を立ち上げ、市長交渉や教育長交渉、新聞投稿もしました。こうした動きによって、少しは学校司書を引き上げる速度が止まったかなと思っていたのです

が、行政のやり方は非常に巧妙で、私が退職をするときに一気にやられ、その後着々と非常勤に移行していきました。こうした中でやはり大事なものは世論を起こしていくことです。例えば、市会議員や市長の選挙があったときには公開質問状を出して、こういう問題があることを知ってもらうように務めました。また、選挙後には、新しい市長を訪ねて行って、学校図書館についての話をしたこともあります。八洲学園大学の高鷲忠美先生にも参加してもらって、市会議員になった人たちとの懇談会もしました。雇用の問題は、正規職員がいれば労働組合が対応してくれますが、全員が臨時職員になってしまうと、どこも声を出してくれなくなるのです。そうなったら行政の言いなりです。ちなみに、市議会に働きかける方法としては、「請願」という方法もあるのですが、請願を出して否決されたらそれまでで、否決されたら汚点になるので、市民運動としてはとても難しくなってきましたので気をつけてください。沖縄県にはこんなにたくさんの学校司書がいるのですから、これ以上状態を悪くしない、なんとか改善していく、という強い気持ちで、市民に問題を知らせる方法がないか、みなさんで力を合わせて考えていって欲しいと思います。私たち力が無い者たちができることは、多くの人を心を合わせ、一致して何か行動を起こし訴えることではないかと思うのです。学校司書の連絡会なども大事だと思います。

望月： 高木理事は、「学校図書館を考える会・近畿」という市民団体にも関わっているようですが、学校司書の配置について、そうした団体の立場からみてどのような取り組みが出来るか、ご助言をいただけませんか？

高木： 近畿圏では、箕面市で学校司書が配

置された後、いくつかの自治体で司書の配置が進められてきましたが、約20年の間に、それぞれの自治体の事情が変わってきていて、いまではさまざまな条件、身分で学校図書館に「人」が入っているという状況があります。こうした状況の中で、私たちは「学校図書館を考える会・近畿」として活動しているのですが、本日は会の代表の北村幸子が会場に来ていますので、北村さんから話していただいた方がよいかと思います。お願いできますか？

北村： 日図研の会員として参加しました北村と申します。これからお話しすることはもしかすると、沖縄の学校司書の方には耳障りなこともある話かもしれませんが、せつ



(フロアからの発言)

かくの機会なので発言させていただきます。五十嵐さんのお話の中でも何度か出てきましたが、この問題についても、まずはしっかりと自分たちのやっている「仕事を見せる」ということがとても大切になってくると思います。今から14年前のことですが、日本図書館協会・学校図書館部会の夏季研修集会を大阪で開催したことがありました。その時、沖縄の司書の方がパネリストとして参加されて、「私たちが当たり前だと思っていた日常のサービスを、大阪では素晴らしい実践とし

てしっかりアピールされていて、すごく新鮮だった、私たちは自分たちのやっていることを伝えることに気づいていなかった」とお話しされていました。それから15年がたちましたが、本日の報告を聞いて、未だに沖縄では、学校図書館の仕事についての理解を広げる意識が強くないような状況のようで辛いなあ、という感じがしています。図書館が整備されていることは当たり前だが、それがどのような仕事をしているのかということ、まず先生方に、そして市民の方にと、広く伝える努力をするべきではないでしょうか。日頃その努力もしないで、雇用状況が悪くなると、市民に「運動してほしい」と願うのは都合がよすぎるのではないのでしょうか。「学校図書館を考える会・近畿」では、市民がいかに自分らしく生きるか、学校図書館づくりをそのひとつの切り口として活動し、それを通して自分の暮らしを考えることを目的としていました。何があっても学校司書を応援するという会ではなく、学校図書館は何ができるのか、教育に活用するにはどのような学校図書館であるべきかを学び、考える活動を続けています。その立場からは、本日のセミナーのように主として学校司書の立場のみで話が深まる研修会の内容は、先生たちや市民には違和感を覚えるように思います。私は、今、まずは市民も教師も、大学の研究者も、「一市民」として学校図書館がどうあるべきか、急激に変わっていく教育のなかでの学校図書館や学校図書館専門職員、という大きな視点で物事を考えることが求められていると思います。

■ おわりに

望月：ありがとうございました。沖縄県は全

国に先駆けて司書を配置して来ました。それだけに、非正規職員化という問題についても先駆的な問題に直面しているのかもしれませんが。本日は学校司書の方が多く集まって頂いておりますが、いまご指摘があったように、学校図書館関係者以外の方にも参加していただいて、いろいろな立場から沖縄の学校図書館について考えていく必要がある、そんなことを改めて感じました。私自身もなかなか短い時間の中でまとめることはできませんが、最後に沖縄からご参加いただいた皆様からひとつ言いつつお願いしてよろしいでしょうか。



(望月道浩氏：琉球大学教育学部)

座間味：2004年、五十嵐さんのかつての勤務校の実践記録「こうすれば子どもが育つ学校が変わる」に大変刺激を受けました。うるま市の司書研修会でも五十嵐さんの活動のもとに学習会を行った記憶があります。言わば学校司書の目標である五十嵐さんから直接お話をうかがう機会をいただき、ありがとうございました。学校で図書館を中心に据えた教育活動を進めるために、如何にそこで働く司書の力が重要であるか改めて認識させられました。また法的に位置づけの無い学校司書という職種ゆえ(今や絶滅危惧種?)だからこそ学び合い、高め合い、常に発信することのできる常時活動が大切なのかも教えていた

できました。またフロアからの、沖縄は15年前から進歩して無いという言葉に、沖縄の今おかれている状況の原因も垣間見せられた気がして反省させられました。沖縄の研修会でこのように熱い議論が闘わされたことはなかったような気がします。このような、機会をいただきありがとうございました。

野里： 普段漫然と考えていることを、この場に出るにあたり具体的に考え直すことができたのが、個人的にはよかったです。学校図書館というものを軸に、様々な方からの発言や提案が聞けたのもよかったです。いささか話題が拡散していたかなって気もしますが、この場で応酬がなされた話題、さわりだけとはいえ出された話題、そのどれもが今後学校図書館で働いていく際の刺激や、考えを深めるきっかけになるような気がします。生の言葉が飛び交う場に居合わせることは、資料を読むだけでは感じ得ない何かを受け取ることができるようで、私自身はとても勉強になり

ました。ありがとうございました。

喜納： 先生方へのアプローチや図書館を学校でどう活かせばいいのか悩んでいましたので、とても参考になりました。特に「仕事を見せる、成果を見せる」という言葉が心に残りました。今日学んだ具体的な実践や働きかけを出来ることから行っていきたいと思います。ありがとうございました。

望月： 私の司会進行の手際が悪く、かなり時間が押してしまいました。この他にも皆様から頂いた質問があるのですが、もしお時間が許すようでしたら、この後懇親会がありますのでそちらでお答えいただくということでお願いできればと思います。本日の座談会は以上とさせていただきます。ありがとうございました。



沖縄印刷団地協同組合・官公需適格組合認証

ISO14001 認証取得

沖縄製本株式会社 ●全省庁統一資格業者
●沖縄県知事登録

〒901-1111 沖縄県島尻郡南風原町字兼城 577 番地
電話 (098) 889-1356 FAX (098) 888-4360